

ネコ（猫）と日本語

—— 「ネコ」の起源と「猫」に係る慣用表現についての考察 ——



<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2026-21-102-113>

小池 里奈 (Rina KOIKE)

日本語教師

タシケント国立東洋学大学 修士

chibimerina@yahoo.co.jp

要約

日本に於いて古くから親しまれてきた「猫(cat, 英語)」を取り上げ、「猫」の呼称の由来について縄文期にまで遡って考察する。「猫」の人間との係りの中で発生し使われてきた「猫」を含む成句や諺について言語学的な立場から考察する。「猫」についての縄文期の記憶が現代に至るまで「猫」にまつわる言語表現の中に影響を与えていることを考察する。「猫」を主語とする成句や諺について、格助詞の「が」と取り立て助詞（副助詞）の「は」の使い分けについて詳しく考察する。これらの考察の上において、「猫」を含む成句や諺の意味が、古代から近代までの「猫」と人間との係りの中で決定づけられていることを理解する。

ABSTRACT

Taking up cats, which have been long cherished in Japan, we examine the origin of the name "cat" by tracing back to the Jomon period, and analyze, from a linguistic standpoint, idioms and proverbs containing a word "cat" that have arisen in relations between humans and cats. We explore how Jomon-period memories of cats have influenced linguistic expressions related to cats up to the present day. We detail the function of emphatic particle "wa" and case particle "ga" in idioms and proverbs that contain the word "cat". We try to understand that their meanings are to be determined in relations between humans and cats from ancient times to modern times.

Keywords: *Neko, Cat, Idiom, Japanese grammar, Case particles, Special particles*

1. 序論

古来日本列島に住み着き日本人と生活を共にしてきた小動物であるネコ（猫）を取り上げ、単語：「猫」に係る日本語の言語表現について、慣用表現を例に挙げて言語学的な考察を加える。現代においても人間と共に生活している小動物を指す名詞：「ネコ（猫）」の源流は明確に

は判っていないが、古代の日本語である大和言葉の発現の時代にまで遡ることはできる。以来、「ネコ（猫）」は現代までの歴史の中で様々な日本語表現の中で使われ、豊かな意味を与えられ、さらに、それらの意味との関わり合いに於いて「ネコ（猫）」に係る表現は淘汰を受けてきた。慣用句、成句、や諺などの慣用表現の中にそれらの歴史を見て取ることができる。言語の構造が言語の構成要素である単語の意味内容によってどのように影響を受けるかを言語学の立場から考察を加えることは「言語」の理解を深める上で大変重要な視点であると考えられる。猫と人間の長い共生の歴史が「ネコ（猫）」を含む「文」を育ててきたことを考慮するならば、「ネコ（猫）」の慣用表現」を言語構造の観点から分析し研究を進めることは大変有益である。文中に単語：「ネコ（猫）」を含む慣用句、成句、や諺などの慣用表現を文献中から収集し、これらの慣用表現の言語構造を分析し、人間との長い共生の歴史を持つ小動物である猫が文や句の中で表現されるとき、「ネコ（猫）」の持つそのような背景が文や句の構造にどのような影響を与えるかについて研究する。とりわけ、名詞に膠着して使用される格助詞の「が」と取り立て助詞（副助詞）の「は」の用法の分析を行い、名詞である「ネコ（猫）」との相関関係（correlation）について調べる。

このような解析においては、着目する単語である「ネコ（猫）」が表す小動物と人間の関わり合いの蓄積を歴史に沿って調べ理解しておくことは避けられない。そこで、解析に先立って、縄文時代の「オオヤマネコ」と現代につながる「イエネコ」の関係を調べ、「ネコ（猫）」という言葉の源流について、縄文時代にまで遡っての検討を行い、そして、平安時代から現代にいたるまでの日本人の猫との関わり合いについて調べる。

日本における猫と人間の緊密な関係の中から発生した猫に関わる慣用句、成句、や諺を言語学的な立場から分析することによって、日本語の文法における、単語の意味と言語の構造が互いに関わりあって作り出されている複層的な構造について考察を行う。単語の意味と言語の構造が互いに関わりあって作り出されている文章の複層的な構造について考察を行う上で、事例となる単語の選択は極めて重要である。具体的ではあるけれども普遍的に知られた単語を採用することにより、形式的な定義に依存することなく、科学的に厳密な議論を展開することができる。

本論考では「ネコ（猫）」の慣用表現の分析研究によって、単語の意味と文の表現が互いに相関（correlate）するように見える事例が提示される。膠着語のひとつである日本語において助詞（particle）の選択が、使われる名詞の意味に影響されるように見える事例があることが指摘される。このことは言語の構造と単語の意味が互いに独立ではないという自然言語の特質に沿ったものと言え、本研究は、理論的には日本語もその範疇に入るとの主張をなすものである。この点を考慮することによって、日本語による文章表現を行う際に、使用する単語の歴史的背景や文化的背景を斟酌することの実践的意義が理解される。

2. 猫の日本史、「ネコ」の起源

最近の遺伝学的研究により、現代の日本で暮らす家畜の猫、家猫（イエネコ）に直接つながる祖先は平安時代の九州に本格的に渡来し、その後鎌倉時代に入って大きく増え、さらに日本列島を北上するように広まったことが明らかになりつつある[1, 2]。遺伝学的に遡ることができる「ネコ」は平安時代までと明らかになったとはいえ、さらに遡る時代には「ねこ」、「ねこま」、あるいは「狸（り、ねこま）」と呼ばれて親しまれた動物が日本列島に居たようである。飛鳥時代から奈良時代にかけて、猫に似た動物を総称して「狸（ねこま）」と呼んでいたようである。その中には現代の「ヤマネコ」に繋がる「ネコ」も居て人間の生活圏の中にも数多く棲息していたようである。現代の「イエネコ」に繋がる種が居たか否かについては科学的には判っていない。文献史料に猫が登場し始めるのは平安時代からである[3]。「今昔物語（1120年代以降に成立）」の「大蔵大夫藤原野清廉、怖猫語（おおくらのだいぶふじわらのきよかど、ねこをおそるること）」の中にネコ嫌いの男の話が出てくる[4]。そして、この物語の時代には「ネコ」は既にありふれた動物であったと推察される。しかし、これらが現代の日本で暮らす家畜の猫、家猫（イエネコ）であったとの確認はできていない。現代の家猫（イエネコ）に繋がる猫が平安時代あるいは奈良時代に大陸から渡ってきたとの説は、遺伝子解析の結果[1, 2]と矛盾しない。しかし、それ以前にも「狸（ねこま）」が日本列島に棲んでおり、市中で暮らしていたこともまた確からしい。他方、平安時代の文献には「唐猫（からねこ）」という言葉が登場する[5, 6]。そして、この唐猫は当時とても珍しい動物であった。

現代の猫、家猫（イエネコ）、に繋がる猫が弥生時代に稲作とともに大陸からもたらされたという考え方があるが、是とすることは困難である。家猫（イエネコ）は平安時代には「唐猫（からねこ）」[5, 6]と、「唐」と「猫」の複合語で呼ばれていた。このことは、「唐」でない「猫」が当時、人間の生活圏に棲息していたことを意味する。でなければ、複合語「唐猫（からねこ）」を用意して識別必要はないからである。大蔵大夫藤原野清廉[4]が見たのは「唐」でない「猫」であると考えられる。この「唐」でない「猫」が家猫（イエネコ）であったならば、「唐猫（カラネコ）」は家猫（イエネコ）であるから、「唐」でない「猫」と「唐」である「猫」を分類、識別する言葉としての「唐猫（からねこ）」は成立しない。したがって、上代において「狸（り、ねこま）」あるいは（ネコ）と呼ばれていた小動物[3]は家猫（イエネコ）ではなかったと考えるのが合理的である。弥生時代にはベンガルヤマネコの流れを汲むイリオモテヤマネコやツシヤマネコが日本列島に棲んでいたため、これらの動物が（ねこ）あるいは（ねこま）と呼ばれていたと考えられる。ヤマネコとイエネコは交配しない。「カラネコ」が（ねこ）あるいは（ねこま）と似ているが異なる動物として識別されるために、複合語としての「唐猫（からねこ）」の呼称で呼ばれた。時代が下がって、ヤマネコが人間の生活圏から外れ、識別の必要がなくなって単に（ねこ）と呼ばれるようになったと考えられる。（ねこ）は上代から中世にかけて、「ヤマネコ」に対する呼称から「イエネコ」に対する呼称に転化したと考えられる。（ヤマネコ）は「イエネコ」に対立する言葉で、「ネコ」がヤマ（山）にいるのが当たり前の時代には「ヤマネコ」は単に（ネコ）だった。時代を遡っ

て呼称（ねこ）の起源を探るには日本列島における人間と「ヤマネコ」との関わり合いを調べることに
よって可能だと考えることができる。

弥生期の日本列島にはベンガルヤマネコの流れを汲むヤマネコが住んでいた。さらに遡って縄
文期の日本列島にはシベリアヤマネコの流れを汲むオオヤマネコが住んでいた。「オオヤマネコ(Lynx)」
は、後期更新世～縄文時代晩期まで日本列島（本州～九州）に広く棲息していた大型ネコ科
動物で、現在の「シベリアオオヤマネコ」に近い系統と考えられている。縄文遺跡からは骨や加工品が
多数見つかリ、縄文人に捕食され、牙や骨が加工され、装飾品として利用されていたことがわかって
いる[10]。「オオヤマネコ」は中型～大型の肉食獣で、毛皮・牙・骨が利用価値を持つ。牙の装飾品
は、狩猟の成功や霊的な力を象徴する護符として使われた可能性が高い[11]。縄文時代には「オオ
ヤマネコ」は霊的な力を持つものとして崇められ、その霊的な力を自身に取り込むために狩られ食用と
されていた可能性が高い。

一方、縄文時代の人々は既に海洋を航海する技術を持っており、中国南方地方特に揚子
江周辺、東南アジア等との関係を持っていた[12]。Sergey Lapteff は文献[12]で次のように指摘して
いる。



図 1. オオヤマネコ (Lynx)

Martin Mecnarowski (<http://www.photomecan.eu/>) -
投稿者自身による著作物, CC 表示-継承 3.0,

<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=12690964> による。



図 2. じよもにゃん

西暦 2000 年に福島県郡山市西田町の町 B 遺跡から出土した
縄文時代の「ねこ頭形土製品」
2023 年に「じよもにゃん」と名づけられた。

Jomon is frequently connected with the continental cultures of Northeastern Asia, although there is considerable evidence showing its relationship to southern parts of the Asian continent (specifically, to the region around the Yangtze River, to what is today Southern China, and to continental Southeast Asia), as well.

最近の遺伝子解析[13]や石器の解析[14]によって日本列島への人類移動の複数ルートが議論され南方からの海洋ルートは現実的であることが科学的に裏付けられつつある。実験によって当時の船で台湾から与那国島への渡航が可能であることが示されている[15]。インド洋沿岸→東南アジア→台湾→沖縄→日本列島というユーラシア大陸の南岸に沿う海洋ルートは、遺伝学・考古学・海洋実験、のすべてで裏付けられている。縄文時代の人々がこのルート沿いに行き来し、交易を行っていたと考えるのは不合理ではない。言葉の行き来・交流もあったと考えられる。交易の必要上、言葉も南方から輸入したと考えるのは無理のある推論ではない。日本語の起源について、批判されることの多い大野晋の「日本語 = タミル語接触言語説」[16]についても、「南方ルート説」を基礎に検討しなおすことは意味がある。



図3. 台湾－与那国島への渡航実験[15]。朝日新聞、2025年7月26日

縄文文化は文字を持たなかったし、口伝を司る語り部もいないので、縄文人が「オオヤマネコ」を何と呼んでいたかを知ることは難しい。弥生人についても「ネコ」の呼称がなんであったかを文献的に確認する術は無い。呼称（ねこ）あるいは（ねこま）の起源が弥生時代であることは考えにくい。第1に弥生時代に先立つ縄文時代に「オオヤマネコ」が棲息していて、これに名前が付けられていたと考えられること。第2に弥生時代には大陸との交流が緊密化したにもかかわらず、現代の東アジアや東南アジアの言葉を調べてみても（ねこ）という発音ないしは（ねこ）に似た発音を持つ小動物は見当たらないこと。「ネコ」は中国語：猫（māo）、朝鮮語：고양이（コヤンイ）、ベトナム語：（mèo）、タイ語：（maeo）、モンゴル語：myyp（muur）、であって、どれも（ねこ）に似ていない。（ねこ）は借用語ではなく縄文期に日本列島内の固有語として発生し、現代まで語り継がれてきた言葉である可能性が高い。縄文期にはユーラシア大陸の南岸に沿う海洋ルートに沿って文物の交易があったが、（ねこ）がこの海洋ルートに沿った地域からの借用語である可能性は低い。これらの地域に「オオヤマネコ」はいなかった。しかし、縄文文化の南方文化との接触という大きな背景の中で、（ねこ）の起源に南方文化の影響を求めることが出来るかも知れない。

縄文人にとって「オオヤマネコ」は夜陰に隠れ霊的な力を持つ神聖な存在であった。その霊的な力を自身に取り込むために捕食した。骨や牙を加工し護符として身に着け霊的な力を自らの中に取り込もうとした。（ねこ）がこの神聖性を表象する言葉であった可能性を考えることができる。大野晋の「日本語＝タミル語接触言語説」[16]を思い出して、「神聖性」を示唆する言葉をタミル語の中に探してみると、/ne-/、/na-/、等を語幹に持つ言葉が多いのに気付く。実際、

(nēr) : 正しい、真つすぐ、 (niyāyam) : 正義、公正

(nanmai) : 善、 (neṭu): (高い、偉大な)

(neri): (道、正しい道、法)、 (nak-ar): (こそこそする)

(nikac-am): (真実)

など、/ne-/で始まる“正しさ・真実・正道”の語群がある。縄文人に守護霊的存在と考えられ、（ねこ）と呼ばれていた存在と、タミル語の/ne-/ = 正しさ、真実、霊的価値との2つの世界観が、“霊的価値を表す音”として /ne-/ を共有している可能性を考えることができる。そして、さらに敷衍して、縄文

時代の（ねこ）は“夜の守護者にして霊を宿す存在”を意味する言葉だと推認できる。“夜の目が持つ霊的な視線”とか“夜の魔性”といった観念が、縄文人の呼ぶ（ねこ）の背景にあって、これらの記憶が後世の人々の心の中に引き継がれているのだとすれば、平安後期以降の“猫又”伝承や江戸期にかけて猫が化けるのを避けるために“尾曲猫”が好まれたという事実とその残影を見ることができる。



図4.化け猫の絵。Copilot 使用。 図5.猫又、鳥山石燕『[画図百鬼夜行](#)（1776年）』

ちなみに、世界的に見ても年老いて猫が化けることは日本を除いてほぼ無い。結論としては、次のように言えるのではないだろうか？

「ネコ」の呼称は縄文時代の「オオヤマネコ」の呼称だったものが後世の「イエネコ」の呼称に転化した。その際に「ヤマネコ」についての「霊的イメージ」の記憶も「イエネコ」のイメージに上書きされた。

「ネコ」と「猫（ビョウ）」は、日本語において同じ動物を指す言葉である。「ネコ」は大和言葉（縄文語）、「猫（ビョウ）」は漢語に由来する言葉である[9]。ネコ（イエネコ）は古代に大陸からもたらされた動物であるとされているが、中国語由来でない「ネコ」という名前を持っている。このことは、和語として縄文時代に「オオヤマネコ」に与えられた「ネコ」が、大陸からもたらされた「イエネコ（カラネコ）」の名前に「カラネコ（唐猫）」として借用され、その後、日本人に親しまれる中で漢語とは異なる名前、和語、としての「ネコ」に定着したと考えられる。文献史料に猫が登場し始めるのは平安時代からである[3]。日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』に猫の存在を確認することができる[7]。「猫」は奈良時代から平安時代初期にかけて、遣隋使や遣唐使らの船に乗せられ、仏教が伝わりと同時に持ち込まれたとされている。中国では、猫が仏教の大切な経典や重要書物をねずみから守る使役動物として活躍していた。そのため日本に仏教が伝わる際にも、経典や重要書物とセットで猫が

持ち込まれたとされている。ネコを表す漢字「猫（ビョウ）」も同時に伝わったと考えられる。平安時代の文献には「唐猫（からねこ）」という言葉が登場する。唐（618年 - 907年、中国）から渡来の猫という意味で唐猫と呼んでいた可能性が考えられている[5, 6]。そして、この唐猫は当時とても珍しい動物であった。例えば、『源氏物語（1001頃から執筆が始まり1021年頃までに完成）第34帖若菜上』には、柏木が女三宮に近づくために彼女が飼っている猫を盗もうとするエピソードが描かれている。

「夜陰に隠れ霊的な力を持つ神聖な存在」としての縄文期の「ネコ」のイメージの記憶は後世の庶民の猫に対する嗜好にも影響を与えた。また、「ネコ」についての「魔性」を伴った言葉や成句を導くことになったのかも知れないと考えられる。時代が下がって江戸時代になると「ネコ」が町中に放たれて暮らすようになり[3]、「ヤマネコ」はあまり見かけることは無くなったので、「ネコ」は単に「ネコ」と呼ばれるようになり、「唐猫」は死語になった。今日では、「ネコ」は単に「猫（ネコ：訓読み、ビョウ：音読み）」と呼ばれている。ただし、「ビョウ」は単独で「ネコ」の呼称になることはない。「愛猫家（アイビョウカ）」のように、熟語の中で用いられる。

3. 猫の成句、諺

3.1. ネコババ（猫糞）（ねこばば）

本来動物の「猫」とは無関係の成句もネコと関係づけられて解釈されることもあり、これも、ネコと人間の古来からの深い付き合いの故かなと考えさせられる例もある。「ネコババ」はその一例である。これは、猫（ネコ）が自分の排泄物（ババ）を砂で隠す所作を評して「悪事を隠して素知らぬ顔をする。拾い物などをして、それを届けたり返したりしないで、自分のものとして素知らぬ顔をする」と解釈されることが多いのであるが、この解釈には無理がある。「ババ（糞）」は猫にとっても有価物ではあり得ない。人間がその人にとって無価値の物を「自分のものとする」ことはない。「ネコババ（猫糞）」を窃盗行為に結びつけるのは困難である。さらに「ネコババ」は、例えば、「太郎がネコババした」のような文脈の中で用いられるので、「ネコババ」の「ネコ」を「ネコがババした」の主語としてとらえるのでは主語が重複する。「ネコ」が動物の“cat（英語）”でない可能性を考える必要がある。“ネコ”と“ババ”はそれぞれ古代のタミル語の“nak-ar こそこそする (to skulk, 英語)”と“vauv-u 盗む (to steal, 英語)”に対応するという説がある[5]。これに従えば、「ネコババ」は「こっそりと盗む」という意味になる。そして、先述の「太郎がネコババした」は「太郎がこっそりと盗んだ。」の意になり、自然に理解できる。「縄文語（縄文時代の日本語）」として成立した「ネコババ」は動物の「猫」とは無関係にもかかわらず、日本人と「猫」の親しい関係の中で、「猫」と関連付けられて解釈しなおされた可能性がある。猫と人間の緊密な関係を示すひとつの例と考えられる。しかし、さらに、深く考えると「ネコババ」が深く直接に「ネコ」の概念と結びついていたのではとの観念が浮かび上がってくる。「夜陰にまぎれてひっ

そりとやって来てまた去っていく」姿は、縄文人の持つ「ネコ」の霊的なイメージに連なる。「ネコババ」の「ネコ」は最初から一貫して「ネコ」だったのかも知れない。

3.2. 猫を被る（猫被り）（ねこをかぶる（ねこかぶり））

ふたつの意味がある。①本性を隠しておとなしそうに見せかけること、または、②知っているが知らぬふりをしてとぼけること、の意であると考えられている。今日では多くの場合①の意味で使われる。①の意は、猫が一見、おとなしそうに見えるため、それを「被る」ことでそのように振る舞うという意味合いと理解されている。②の意は、「ねこ」と呼ばれる“むしろ（苙）”（稲藁を編んで作られる敷物）に由来するとの理解がある。山形県や新潟県など日本の一部地域で「むしろ（苙）」を「ねこ」と呼ぶことがある。知っているのに知らぬふりをして、「ねこ」をかぶってとぼける様子が由来になったと言われることがあります。「ねこ」の音が「猫」の読みと一致することから、①、②共「猫被り、あるいは、猫を被る」となったとされている。両者共「猫」に関連付けられて理解されるのは、猫と人間との長年にわたる交流を強く示唆するものであると言えるであろう。しかしながら、意味についての①、②の解釈は若干の無理があると言わざるを得ない。

「ヒツジ（羊）の皮を被ったオオカミ（狼）」（新約聖書のマタイによる福音書 7 章 15 節）とか、「ライオンの皮を被ったロバ」（イソップ寓話集、ペリーインデックス 188 番と 358 番）等の例で判るように本性を隠したい者が被るのは「皮」である。「猫」をそのまま「被る」ことはできないし、隠したいのは「見かけ」だけで本性は温存したい訳であるから、被るのは表面を取り繕う「皮」だけと考えるのが自然である。何故、「猫の皮を被る」でなく「猫を被る」なのであろうか？「ねこ」を苙の意味で使うのは「猫」の分布が比較的遅かった北陸、東北地方の一部である。これらの地域で「ねこ被り」なる成句が発生したとしても、これが全国に拡がり、かつ、「猫被り」に転化するとは考えにくい。「ネコ」が「猫（cat）」でも「ねこ（苙）」でも無い可能性を排除できない。“ネコ”と“カブリ”はそれぞれ古代のタミル語の“nikac-am 真実(truth, 英語)”と“kav-i 覆う (to cover, 英語)”に対応するという説がある[16]。この説に従えば「ねこをかぶる」は「真実を覆う」という意味になって、上記の①、②の両方の意味を含みすっきりした形で理解ができる。古代タミル語から生起した言葉が、日本人の長年の「ネコ（猫）」との交流の中で「猫を被る」に昇華していった歴史を見ることができる。しかし、それでもなお、（ねこかぶり）が縄文期の人々の「ネコ」に直接結びついていたと考える相当の理由を見出すことができる。「真実を覆う」猫の姿は、夜陰の中で真実を司るもそれを明らかにしない霊的な存在」という縄文人にとっての「ネコ」の姿である。（ねこかぶり）が猫と結びつけて解釈され

続けてきた理由はここにあるのかもしれない。

次に、「猫を被る」の用法について考察する。「猫を被る」を①の意味で使うときは女性に対して使われることが多いようである。男性にはあまり使用されない。中でも人前で 純粹無垢なふりをするような人を揶揄する表現として使用されることが多いようである。“彼女 A は猫を被っている”とか“彼

女 A が猫を被っている”のように使用する。取り立て助詞（副助詞）の「は」は主語を強調する働きがあるので、“彼女 A は・・・”の場合には、“彼女 A、彼女 B、彼女 C、・・・、と色々いるけれども、他はともかく、彼女 A は猫を被っている、あるいは、猫を被っているのは彼女 A だ”との意になる。対して、「格助詞」の「が」は述語を強調する機能があるので、“彼女 A が・・・”の場合には“猫を被っている”という事実が強調される。本性を隠しているか否かが論点となり、“彼女 A が猫を被っているのは明らかだ”のような文脈の中で使用される。「は」と「が」いずれの場合にも「真実を隠す」との意が伴うので、文脈によっては強い否定的な表現となり、使用にあたっては注意が必要である。

4. 猫の言語学

成句、格言、諺、や慣用句は通常非常に短い文や句として表現され、会話や文章の中で使われるとそれらの内容を豊かにし、かつ、品格を高める働きがある。成句等は意味が凝集された短い文や句で表現されるために、それらを構成する単語はその成立の歴史や人間との係りの歴史など、背景となる事柄を背負って登場する。この背景となる事柄を会話の話し手と受け手の、文章の書き手と読み手の共通の理解として前提することによって初めて、意思伝達や情報伝達の手段として成り立つことになる。

成句や諺等は、短い構文で意味を伝えようとするために、助詞が省略されたり、逆に助詞を置くことによって内容を強調しようとしたりする場合がある。また、中国語由来の句の場合には助詞を欠いていることがある。日本語の最も簡単な構文は、「主語」を S、「目的語」を O、そして、動詞を V、として、S-O-V あるいは S-V の形を取る。S と O には通常助詞が付随する。これをそれぞれ p および p' と表すことにする。すると、日本語のもっとも簡単な構文は Sp-Op'-V あるいは Sp-V となる。このような短い構文においては、文の意味内容を決定するうえで助詞 p が大きな役割を果たす。主語につく代表的な助詞 p には「は」と「が」の 2 つがある。

p = 「は」と「が」の文 Sp-O-V および Sp-V 内での働きについては次のことが成り立つと考えられる。

p = 「は」: テーマを提示する助詞であり、一般的な事実や普遍的な事柄を述べる際に使われる。Sp-Op'-V および Sp-V の中で、S を強調し、その上で、S による行為 V が S にとって一般的であることを主張する。例えば、

「(S=能ある鷹)(p=は) (O=爪) (p'=を) (V=隠す)」

の場合、「能ある鷹」という一般的な存在がテーマとなり、その行動が普遍的な事実として述べられている。

p = 「が」: 特定の主語を強調する助詞であり、具体的な事例や特定の状況を述べる際に使われる。Sp-Op'-V および Sp-V の中で、具体的な存在として S を強調し、その上で、論の焦点を S による行為 V に当てる。例えば、

「(S=上手の猫) (p=が) (O=爪) (p'=を) (V=隠す)」

の場合、「上手な猫」という特定の存在が強調され、その行動が具体的な事例として述べられている。

このように、助詞「は」と「が」の使い分けによって、同じ意味を持つ慣用句でも微妙なニュアンスの違いが生じる。これにより、表現の幅が広がり、より豊かな言語表現が可能となる。

5. 結論

日本に於いて古来愛玩動物として飼育されてきた「猫(cat, 英語)」を取り上げ、日本における「猫」の歴史と「猫」の呼称の由来について考察し、その上で、「猫」の人間との係りの中で発生し使われてきた「猫」を含む成句や諺について言語学的な立場から分析した。「ネコ」の呼称は縄文時代の「オオヤマネコ」の呼称だったものが後世の「イエネコ」の呼称に転化したことを指摘した。その際に「ヤマネコ」についての「霊的イメージ」の記憶も「イエネコ」のイメージに上書きされて現在に至ると考えられる。

「猫」を含む成句や諺について、格助詞の「が」と取り立て助詞（副助詞）の「は」の使い分けについて詳しく考察した。格助詞の「が」は主語を指示し述語に論の焦点を当てる働きがあり、取り立て助詞（副助詞）の「は」は主題を提示し述語が主題に対して一般的に成り立つことを示す働きがあるが、これらが、短い文、すなわち、成句や諺の中で使われた時には成句や諺の主張を際立たせ強化することを詳細な分析によって明らかにした。

参考文献

- [1] 松本悠貴, “遺伝子から見たネコの世界”, milsil, 国立科学博物館, 15, No.2, 6-8 (2022)。
- [2] 松本悠貴, 中村保一, “猫のゲノム獣医療研究の最前線”, 猫の臨床専門誌「フエリス」, 18, 128-132 (2021)。
- [3] <https://moffme.com/article/1854>
- [4] 桐野作人, 吉門裕, “猫の日本史” 戎光祥出版, 2024年1月10日初版初刷
- [5] 小林明, DIAMOND online, 2024年2月11日 <https://diamond.jp/articles/-/338674>
- [6] 柴内晶子, 日本獣医史学雑誌 59 (2022) pp. 1-20
- [7] 大島建彦 校注・訳: 猫の草紙, 御伽草紙集, 日本古典文学全集 36, 小学館 (1974)
- [8] <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本国現報善悪靈異記>

[9] <https://nekochan.jp/column/article/16529>

[10] 長谷川善和、金子浩昌、橘麻紀乃、田中源吾、“日本における後期更新世～前期完新世産のオオヤマネコ Lynx について”、群馬県立自然史博物館研究報告（15）：43－80, 2011.

Bull.Gunma Mus.Natu.Hist.（15）：43－80, 2011.

[11] 佐藤孝雄、“日本列島に棲息したオオヤマネコに関する学際的調査・研究”、科学研究費助成事業研究成果報告書、令和7年6月10日、課題番号：21H00613/23K20533

[12] Sergey Lapteff, “Relationships between Jomon Culture and Cultures of the Yangtze, South China, and Continental Southeast Asian Areas”, Japan Review, 2006,18:249-286.

[13] NAOKI OSADA, YOSUKE KAWAI, ”Exploring models of human migration to the Japanese archipelago using genome-wide genetic data”, Anthropological Science, 2021, Vol. 129, pp45-58, Online ISSN 1348-8570, Print ISSN 0918-7960, <https://doi.org/10.1537/ase.201215>,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ase/129/1/129_201215/article/-char/en.

[14] Buvit, Ian & Terry, Karisa & Izuho, Masami. (2022). Pathways along the Pacific: Using early stone tools to reconstruct coastal migration between Japan and the Americas. 10.4324/9781003139553-4.

[15] Rintaro Sakurai, “Early humans likely navigated strong currents to reach Japan”, The Asahi Shimbun July 26, 2025. <https://www.asahi.com/ajw/articles/15877133>

[16] 田中孝顕、“よみがえる大野 日本語＝タミル語接触言語説”幻冬舎、2023年8月31日